

# もつと知りたい

武者小路実篤

美<sup>さね</sup>篤<sup>あつ</sup>作品を読んでみよう!

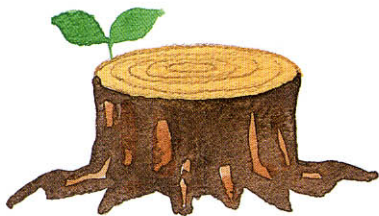
## 桃源にて

昔むかし中国に、この世のものとは思えないくらい美しい桃の山をつくろうと、来る日も来る日も桃の木を植え続ける男がいました。

その大切な桃の木は、少女をかくまった罰で切り倒され、また、王様の離宮に移植するために、残らず持っていかれてしまいました…

すっかり落ちこんだ男のところに、老人がやって来て、次のようにさします。

切られた桃からはちゃんと芽が出ている。刃が君はどうだ。すっかり力を失っている。尤もまだ私は君に失望していない。君はきつと、又更に大きな考を起して仕事にとりかかってくれるだろう。生きている間は、失望することを知らない男であってほしい。死ぬまではいくら切られても、折られても、又生きかえる男であってくれ。そう云う男のいてくれることは、人間に生れたよるこびなのだ。あの桃の芽を見てやれ。



武者小路実篤「桃の花」  
昭和17(1942)年

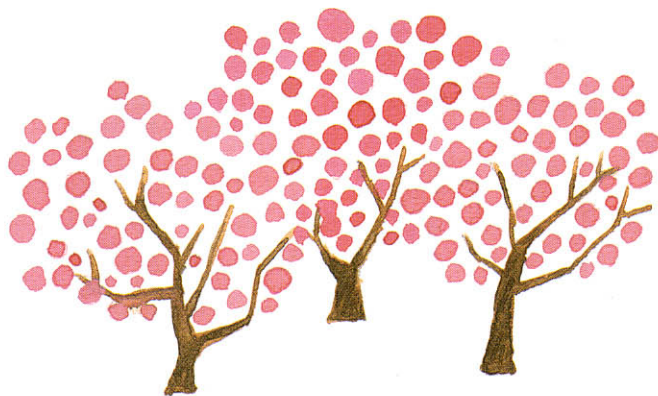
こんな作品

桃源にて

大正12(1923)年8月、実篤38歳のとき、宮崎県の新しき村で書いた作品。



かみしばい  
紙芝居になった「桃源にて」  
昭和28(1953)年5月、教育画劇



## 考えてみよう!

一見ハッピーエンドのこの物語ですが、実篤が他の作品でもよく取り上げた、  
重いテーマが隠されています。

- ある少女が追われて助けを求めたとき、桃を植える男の弟は、うそをついても少女をかくまいつけましたが、その兄の桃を植える男は、人の命よりも自分が植えた桃の木の方を大切と考えました。
- 自分が心血を注いでいる仕事のためには、人を犠牲にしてもやむをえないと考える兄と、兄の仕事を尊敬しつつも、その発想の恐ろしさにいきどある弟。
- ♥実篤は、どちらも間違っていないと考えていました。あなたなら、どう思いますか？



老人の言葉に励まされて、男は再び桃の木を植え始めます。  
十数年後、桃の花は、より一層美しく咲いていました。その理由について  
男は、人を感じさせたいという気持ちや、執着する気持ちがなくなつて、  
またいつ桃を全部持っていかれたとしても覚悟ができている、すべてを  
何かに任せて、すっかり落ちついていっているから、と述べます。